スズ・シアター・ミュージアム「光の方舟」

この民俗博物館では、町の記憶がよみがえります。この博物館は、芸術を使って、訪れる人々に珠洲の歴史と住民の暮らしを伝えます。能登半島の先端にあるこの田舎の街は、かつてはにぎやかな商業・漁業港でした。珠洲への鉄道は 2005 年に廃線となりました。主産業は今もなお農業と漁業ですが、時代とともに、若い住民たちはより大きな都市へと移り住んでいます。現在では、地域の人口の半分以上が 60 歳を超えています。

多くの高齢者住民は、蔵のある大きな家にひとりで住んでいます。これらの蔵は、何世代もの間放置されてきた民具、家具、そして雑多なものでいっぱいです。これらの品は、普通なら、所有者が引っ越したり、亡くなったりした時に、捨てられてしまうでしょう。若い人々が、祖父母の古い家具や物品を欲しいと思うことはめったにありません。このため、これらの品々をめぐる物語は、失われつつあります。

この博物館は、2021 年の第 2 回「奥能登国際芸術祭」のために開設されました。この地域の価値ある民具を保全し、年配の珠洲市民の物語を保存することが目的です。ボランティアは、不用品を集めた際、その所有者からお話を伺いました。

8 名の芸術家が、これらの平凡な品々とその背後にある物語を再利用し、インスタレーションと映像を通して珠洲の歴史を新しい聞き手に伝えることを依頼されました。これらの品々の多くは、17 世紀から 19 世紀初期にさかのぼるものです。これらの品々は、朱塗りの皿から、酒樽、漁網、珠洲焼、鍋、織機、さらには 1960 年代のテレビまでさまざまです。

この博物館は、閉校した小学校の体育館にあります。この学校の閉校も、この地域の人口減の影響の 1 つです。この空間は、民話・人類学・歴史を中心に緩やかな主題を持つ区域に分けられています。訪れる人は、この空間を歩いて回り、いくつかの芸術作品の中を通ることもできます。たとえば、『ドリフターズ』というインスタレーションでは、朱塗りの漆器が棚に高く並べられた中を通って、珠洲の歴史に入り込んでいきます。

大川友希『待ち合わせの森』

芸術家の大川友希は、使われなくなったキリコ (灯籠) 祭りの山車を、色鮮やかな端切れで覆いました。その目的は、珠洲の祭りの活き活きした雰囲気をとらえることにあります。祭りは、人々が集まって考えと経験を分かち合う場なのです。古着の布を結び合わせた長いひもは、この地域の空き家を覆って育つつると葉に似ており、記憶の森を創り出しています。

OBI『ドリフターズ』

OBI は、美術・建築・映像の各分野を横断して活動している芸術集団です。OBI は、家庭での宴に用いられた、朱塗りの揃いの食器 (御膳) を数百点集めました。この揃いの食器は、お客をもてなすために使われました。特に、友人・親族・隣人が互いを招いたであろう祭りの時期に使われました。訪れる人は、朱塗りの漆器を高く積み上げた棚に囲まれます。これが、この地域のおもてなしと伝統の重みに関する力強い体験を創り出します。

久野彩子『静かに佇む』

金工芸術家の久野彩子は、見る人の注意を小さな細部に向ける、複雑な金属彫刻を創っています。彼女は、木製のはしごから、熊手やくわまで、古い農具を集めました。そして、農具の間の欠けや割れ目に、小さな金属の家々と町並みをはめ込みました。彼女は、捨てられた農具を借景として使い、映画のようなスポットライトで照らして、これらの農具に新しい役割を与えています。

竹中美幸『覗いて、眺めて、』

半透明の素材、光、そして影を取り入れたインスタレーションは、珠洲にある蔵の 1 つで見つかった日記に着想を得たものです。芸術家の竹中美幸は、日常生活の品々を再利用し、光で満たされた半透明の小屋の周りに集めて、日記に書かれた記憶を描きました。小屋の中に吊るされたページと雑多なものは、詳細を明らかにすることなく日記の著者の考えをほのめかしています。

南条嘉毅『余光の海』

この博物館で最大の作品は、かつて漁網を浮かせるのに使われていたガラス浮き玉、ピアノ、古い漁船の残骸が散らばる砂場です。芸術家の南条嘉毅は、珠洲の環境を、その歴史と漁業の遺産から考察し、この地域の古い地層から掘った砂を取り入れました。蔵で見つかった手書きのメモと波の模様が、砂の上に投映されています。南条は、時代と状況が変わっても思い出は残る、という考えに着想を得ました。

橋本雅也『母音／海鳴り』

芸術家の橋本雅也は、主に粘土で作品を創っています。彼は、焼物と瓦の中心地としての珠洲の歴史を活用しています。彼は、瓦工場の跡地から道具を集め、文化の歴史と自然界とのつながりを表現する粘土の作品を創りました。粘土の作品が廊下の床に沿って配置され、見る人を、博物館の暗い内部から、外より入ってくる光の方へと導きます。粘土の作品は、海岸で洗われる小石や、鯨の骨のかけらに似ています。手作業や道具で形作られた各要素は、なじみ深さを感じさせます。

世界土協会『*Soilstory* -つちがたり-』

この日本とシンガポールの芸術集団は、ミクストメディアで活動しています。この集団は、奥能登地域の農家で何世代も伝えられてきた、各家の信仰の一形態である「あえのこと」を研究しました。毎年冬、各家庭は、田の神に感謝し、田んぼに作物がない間は家で休むよう田の神をお迎えする儀式を

行います。春には、豊作を祈り、田の神を田んぼに送るもう 1 つの儀式があります。各家庭の慣習は少しずつ異なり、各家庭の慣習を他の人に伝えることはほとんどありません。しかし近年、伝統を守る一助として、いくつかの儀式は見学者に公開されています。この芸術集団は、上記の儀式の経験について地元の人々に話を聞き、儀式に関する映像と物のインスタレーションを創りました。

三宅砂織『*The missing shade 59-1*』『*Seascape* （*Suzu*）』『*Untitled*』

小さな暗い部屋は、船の部材、写真、映像、プロジェクションを通して、船に関する珠洲の過去の諸要素を明らかにしています。芸術家の三宅砂織による塩の結晶のフォトグラムが、この部屋の中に投映されます。見る人は、広大な海の風景から、塩の最も小さな結晶まで、珠洲での暮らしの一要素として海を認識することができます。この船は、海の力によって難破したのかもしれませんし、単に歴史によって無視されてしまったものかもしれません。